

♪♪♪ いい歌、いい町、いい自然 ♪♪♪

No. 491

2003. DEC

広報

# あかいけ

# 12

語り継ぎたい。ヤマの物語を

特集

ヤマ  
ママ  
炭鋤

# ヤマ 赤池、炭鉱の 歴史

特集

# ヤマ 炭鉱

忘れ去られる繁栄と衰退の記憶。  
子どもたちは炭鉱の鼓動を知らない。  
いま、高らかな誇りをもって伝えたい。  
忘れないでほしい。  
この町に炭鉱があったことを――

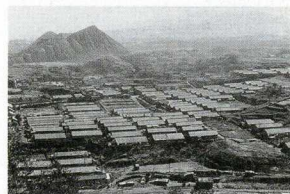
- 1712(正徳2) 赤池で燃える石が見つかる
- 1837(天保8) 小倉藩が赤池会所を設置
- 1869(明治2) 自由採掘により石炭乱掘
- 1871(明治4) 赤池会所を赤池石炭方に改正(小倉県)
- 1873(明治6) 赤池石炭方を赤池石炭所に改名
- 1885(明治18) 筑豊石炭坑業組合を組織(後の筑豊石炭鉱業会)  
筑豊の名が使われ始める。
- 1886(明治19) 筑豊五郡川轉同業組合設立(明治27年には7千艘)
- 1888(明治21) 赤池選定鉱区を安川敬一郎、平岡浩太郎が  
共同出願協定を結ぶ(明治34年・安川敬一郎専有)
- 1890(明治23) 赤池竪坑完成
- 1894(明治27) 赤池炭鉱が汽車輸送を開始
- 1896(明治29) 明治炭坑株式会社設立
- 1902(明治35) 赤池鉱山学校開校(明治37年廃校)
- 1908(明治41) 明治・赤池・豊国炭鉱を合わせて  
明治炭業株式会社設立
- 1921(大正10) 赤池発電所開設
- 1930(昭和5) 女性の入坑を禁止
- 1935(昭和10) 第三坑ガス炭塵爆発で83人殉職  
(赤池坑最大の事故・重軽傷17人)
- 1939(昭和14) 豊国炭業所を赤池炭業所に編入
- 1944(昭和19) 赤池炭業所最盛期、鉱員数3千853人  
人口1万7千507人  
(昭和48年・8千916人に減少)
- 1951(昭和26) 重油・石炭の輸入で炭鉱業界不況  
(合理化が閉山につながる)
- 1955(昭和30) 石炭鉱業合理化臨時措置法公布  
(合理化が閉山につながる)
- 1958(昭和33) 赤池発電所閉鎖
- 1961(昭和36) 産炭地振興臨時措置法公布
- 1965(昭和40) 明治炭業赤池工業所閉山  
第二会社・赤池炭業株式会社発足
- 1966(昭和41) 炭坑病院を町に移管  
翌年にかけて炭坑水道を町に移管
- 1969(昭和44) 産炭地域開発就労事業開始
- 1970(昭和45) 赤池炭業株式会社閉山



## 旅の僧が手にした燃える黒石…坊主ヶ谷伝説

# 今

から3百年ほど昔、正徳2年（1712）の冬の出来事だった。大雪に見舞われたその日、一人の僧が赤池から筑前勢田村まで行く峠の手前で立ち往生していた。疲労と空腹で困り果てた旅の僧は、山肌に穴を掘り、たき火で身を暖めた。携帯していた米を雪とともに袋に入れ、火の傍らに埋めて飯を炊く。その時、僧は燃える黒石を目の当たりにした。感激した僧は、このことを里人に言い伝え、小高い丘にお堂を建て、菩薩を安置した。この行いに対し、里人はいつしかこの地を「坊主ヶ谷」と呼ぶようになった。



明治鉱業赤池鉱業所第1坑があった高尾地区。寿町、高尾通りに炭鉱長屋が建ち並んでいる。奥は金田町のボタ山。



昔の赤池駅付近。石炭を運ぶ鉄道網が整備されている。車道を通り、坊主ヶ谷（高尾）までつながる線路が走っていた。

現在の高尾地区にあたる。今でもここを「谷」と呼ぶ人は多い。しかし、江戸末期から明治時代にかけて石炭が乱掘され、谷の景観は一変した。露出していたであろう石炭層も今日では見る影もない。かつて、小笠原藩が極秘に行っていた石炭の液化燃料開発。その製造工場も見果てぬ夢となり、坊主ヶ谷の地で眠ったままだ。

赤池には東町・西町・南町・北町・中町・新町・車道・掘割など、炭鉱にまつわる地名が多い。だが、クシの歯のように整然と並んでいた炭鉱長屋の面影も今日ではなくなりつつある。命がけで働く坑夫（坑内作業員）たちを送り迎えた「路地」という名の花道が、ひっそりと姿を消そうとしている。

のどかな町を一変させ「黒いダイヤ」と呼ばれた石炭。国策として掘り続け、近代日本の繁栄を支えた。明日の命もわからない日々の中には、ヤマに生きた人たちの吹っきたたくましさがあった。石炭から石油へのエネルギー革命にほんろうされながらも、暗いイメージに負けない明るさを持ち続けた。ヤマの光にはドラマがあり、影にもドラマがある――

# ヤマ 炭鉱と生きて